⑳教育条件

谷口　武（市高・東商）
上村　康夫（市障・平野特別支援）

大阪府は、府立高校つぶし、障害児学校の過大・過密、教職員の定数削減、教育予算を削減し、教育切りすてとしか言いようのない施策をとってきました。その結果、どの学校にも、教育諸条件の低下や教職員の大変な多忙化が生みだされています。私学助成の大幅削減や教職員の削減などの橋下「改革」は、これらをいっそう推しすすめました。長期に続く不況下のもとで、大阪の子どもたちは、極めて貧困な教育条件の下におかれています。そして貧困と格差が広がっています。子どもたちの就学（修学）保障をすすめる運動、自校方式の中学校給食を実現する運動などを学校で働く教職員だけではなく、教育行政や保護者・地域住民のみんなが協力しあって希望にあふれる学校を作るとりくみがたいせつであり、すべての子どもたちが大切にされ、安心して学習することができる教育条件の整備がもとめられます。

㉑環境・公害問題と教育

高橋　慶二（交野・郡津小）
谷殿　茂明（八尾・美園小）

３.11の東日本大震災は地震と大津波で大きな被害をもたらしました。今も余震が続き、福島の原発事故による避難生活・復興の目途も明確になっていません。そうしたなかで「脱原発」、エネルギー政策の転換を求める声が日本でもドイツやイタリアなどヨーロッパの国々でも大きく広がっています。私たちの分科会では、永続可能な社会（サスティナブルソサエティ）建設への道筋を明らかにすることを研究目標の一つにすえて、身近な環境問題から公害問題、地球環境問題を市民グループの実践報告矢教育実践・教材分析などそれぞれの立場から報告いただき交流してきました。昨年度は大阪市の水害やアスベスト公害、エネルギー問題、ごみ問題、里山、地球史と環境教育などの実践が報告されました。本年度はレポート発表、フリートーキングにくわえ、共同研究者によるエネルギー問題についてのミニ講演を設けたいと思います。みんなで生きていける社会について話し合いましょう。

㉒文化創造と教育

堀口　清志（立命館大学）
宮本　貴子（府障・泉北高等支援）

「厳しい競争的環境におく。強い力で規範を守らせる。基礎的な知識は刻み込んででも教える」といった風潮が子どもたちを「生きづらい社会」の中へ追い詰めていないでしょうか。

私たちは、これまで橋下府政の「文化つぶし」政策に反対し、次の点を確かめ合ってきました。①地域の文化や歴史、平和の大切さを語り伝える、歌い続けることは人と人とのつながりをつくり、広げていくことです。②人間への信頼を豊に育む文化は広く人々の共感の輪も広げる。子どもたちはもちろん、大人たちも文化を吸収して成長していくのです。③学校・地域に於ける図書館の存在意義は大きい。情報発信基地であるとともに文化創造への土壌でもあるのです。④個々の実践を互いに励ましあい、響きあう学校・職場づくり、平和で民主的な社会の形成へと発展させていかなければなりません。自分の思いを形に表し、社会に発信することこそ文化創造の出発点です。みんなで集まって大いに語り合いましょう。

㉓教育課程・教科書

常田　秀和（南河内・彼方小）
山田　憲司（堺・東三国丘小）
山本　修平（枚方・枚方中）
熊崎　聡（柏原・堅下南中）

今年、小学校から新教育課程が始まりました。系統性に疑問を感じる「こま切れ」単元の連続、子どもたちも圧倒される分厚い新教科書等々、昨年までの移行過程とは違った「詰め込み」の実感はないでしょうか。加えて、大阪では「教育力向上プラン」の名目での点数主義・管理強化の進行が危惧されます。

教育課程・教科書分科会は、現場の実感を持ち寄り交流しよりよい教育課程の在り方を広く考えていく分科会です。

子どもの実態に合わせて自主編成をどう進めていくのか。中学校教科書の問題・震災や原発問題をどう伝えていくのか、といった課題も持ち寄りながら現場と子どもたちの現実から出発した教育課程の在り方を考えあいましょう。

今年の分科会では、保護者の皆さんの実感も寄せ合いながらの分科会としたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

㉔生活科

小林　桂子（東大阪・楠根小）
向井夫佐代（柏原・国分小）
本郷佳代子（吹田・北山田小）

新教育課程が始まり、５、６年生は、総合的な学習の時間が１時間減り、外国語活動が始まりました。生活科については、道徳化、他教科との合科の強調など、何を教える教科かさらにわからなくなっています。生活科を教科として認識していない実態すらあります。道徳・特活・各教科と、色々なことが雑多にあつかわれ、「学び方」を学習する時間として位置づけられているのです。生活科は、低学年の子どもたちの「自然」「社会」「人間」に関する学びの場であり、科学的な認識の土台づくりの教科です。

そして、教科学習とも連動し、発展した「総合学習」を追究していきたいものです。

子どもたちが、「やって楽しくよくわかり」教師が「取り組んでよかったと、充実感を味わう」ことができる内容や教材を学び合いましょう。今こそ、「生活科」「総合学習」を洗い直す時です。子どもたちのこと、その学びについて大いに語り合いましょう。

㉕登校拒否・不登校

実森　之生（市障教・本部）
松尾　裕子（八尾・竹渕小）

登校拒否・不登校状態のなかで、悩み苦しんでいる子どもたちやその家族、そしてどう対応していいのかと悩んでいる教職員・学校。

子どもたちは、「心の揺れ」を示しながらも、長い目で見たときには、家族、子ども集団や教職員、様々な人との豊かな交わりのなかで、「揺れつ戻りつ」大きな成長をとげていきます。

家族・教職員・関係者の思い、経験、とりくみを交流しましょう。それぞれの立場からの悩み苦しみ、思いを報告し、互いに豊かな感性を持って耳を傾け共感し、子どもたちの明日について語り合いましょう。

登校拒否・不登校の児童・生徒の子ども理解を、レポート・事例などを通じて深めましょう。そして、子どもたちの成長を願い、父母・地域・教職員の共同による、子どもを主人公にした学校づくりを、今こそ進めようではありませんか。

切りとり線

あなたの日々の実践を寄せてください

（大教組教文部
FAX06－6768－2239）

第61次大教組教研レポート提出届

締め切り　８月末迄

分科会No.		分科会名	
レポート タイトル			
市町村・学校名 （または所属名）			
お名前			
連絡先　住所			
TEL　E-mail			
レポート報告に あたっての要望 時間・ビデオなど			

この用紙を使って申し込んで下さい

レポート要旨（200字）

（タテ書き）